

配筋標準

1 基礎の継手、定着及び余長

基礎の継手、定着及び余長に関する規定。原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、柱内に定着する。ただし、基礎に定着する場合は、図1.4による。基礎に定着する場合は、3.1(1)(イ)による。

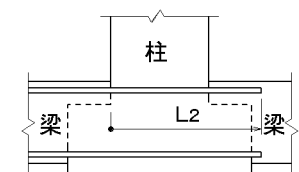


図1.1 梁筋の基礎梁内への定着

(2) 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長

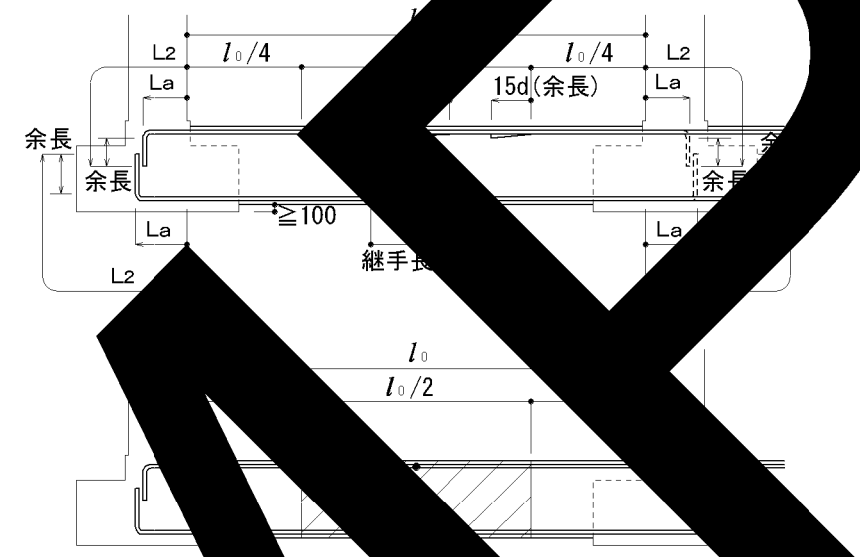


図1.2 主筋の継手、定着及び余長

- 1. 図示のない事項は、3.11による。
2. 印は、継手及び余長位置を示す。
3. 破線は、柱内に定着する場合を示す。
4. Laの数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

(3) 独立基礎で基礎梁にスラブが付く場合の主筋の継手、定着及び余長

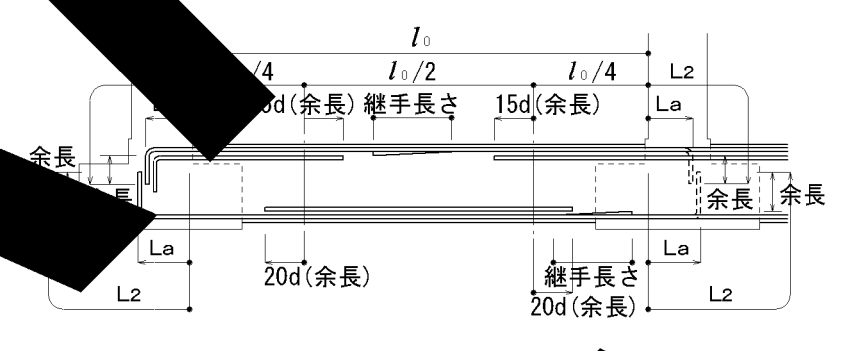


図1.3 主筋の継手、定着及び余長 (その2)

- 1. 図示のない事項は、3.11による。
2. 印は、継手及び余長位置を示す。
3. 破線は、柱内に定着する場合を示す。
4. Laの数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

(4) 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長



図1.4 主筋の継手、定着及び余長 (その3)

- 1. 図示のない事項は、3.11による。
2. 印は、継手及び余長位置を示す。
3. 破線は、柱内に定着の場合を示す。
4. Laの数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

1. 梁のあばら筋の継手、定着及び余長

あばら筋の継手、定着及び余長に関する規定。あばら筋の位置は、3.2(1)による。ただし、スラブが付く場合で、かつ、梁せいが1.5m以上の場合は、図1.5による。あばら筋の位置は、図1.5による。

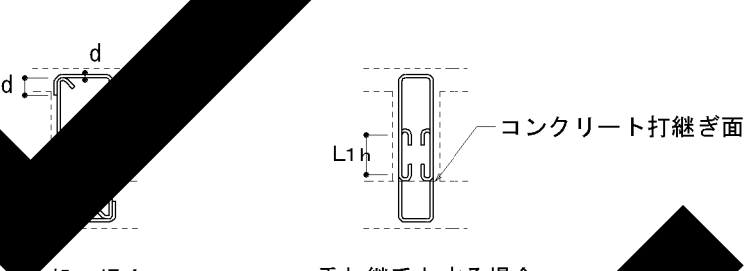


図1.5 あばら筋組立の形及びフックの位置

2. 1 柱主筋の継手、定着及び余長

柱主筋の継手、定着及び余長の一般事項

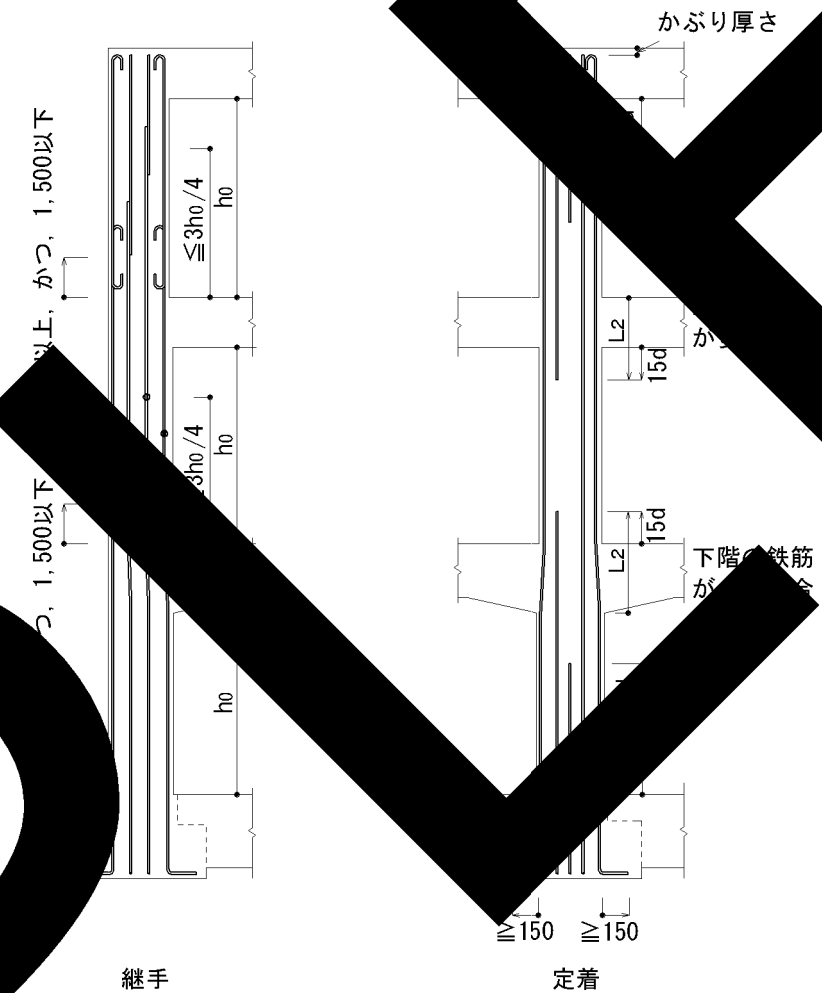


図2.1 柱主筋の継手、定着及び余長

- 1. 柱内に定着する主筋で、重ね継手の場合及び最上階の柱頭にある場合には、フックを付ける。
2. 柱主筋の継手の位置は、標仕(表5.3.3)による。
3. 柱主筋の定着長さL2が確保できない場合は、構造計算等により必要長さの確認を行うものとする。
4. 柱主筋について、梁上端主筋との取合いを考慮し、適切なかぶり厚さを確保する。

柱打増し部に関する規定。柱打増し部に、壁、梁、スラブ筋等がとりつく場合は、壁、梁、スラブ筋等の定着長さには、打増し部分を含む長さとする。柱周囲の打増しは図2.2による。

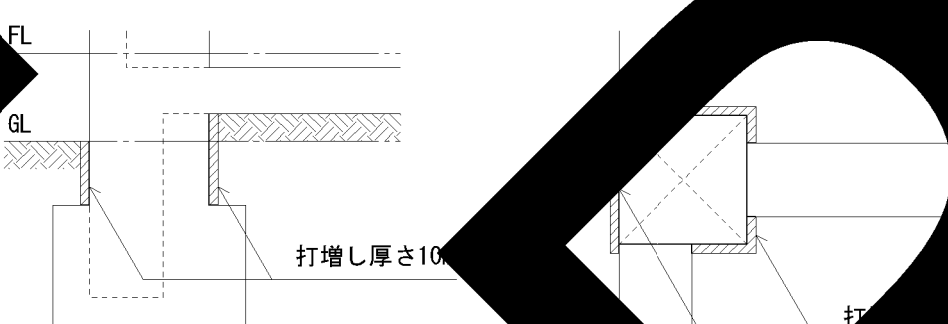
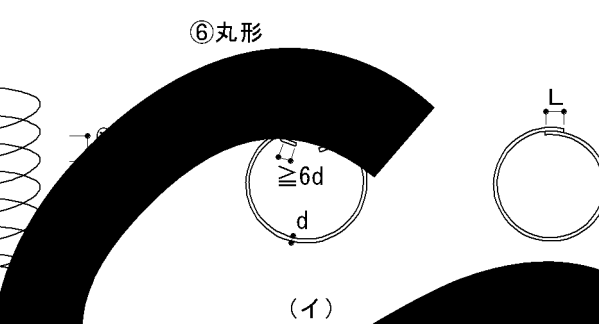
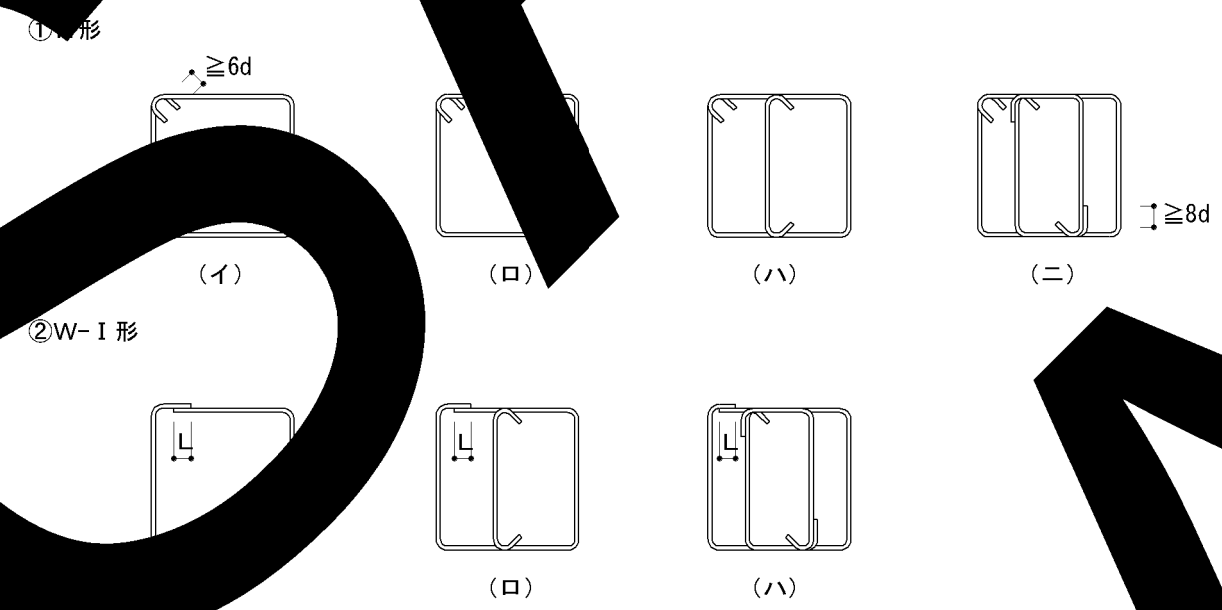


図2.2 柱打増し部

2. 2 帯筋の組立及び割付け



- 1. H形に使用する。
2. 帯筋の継手の位置は、交互とする。
3. 帯筋の組立位置は、帯筋の組立位置で行う。
4. 帯筋の組立位置は、帯筋の組立位置で行う。
5. SP形において、柱頭及び柱脚部は1.5巻以上の添巻を行う。
6. H形の135°曲げフックは、W-I形とする。

図2.3 帯筋組立の形

上下の柱断面寸法が異なる場合、帯筋は、一般の帯筋より1サイズ大きい鉄筋又は同径のものを2本重ねたものとする。

- 1. 柱に取り付く梁に段差がある場合、帯筋の間隔を1.5P1@または1.5P2@とする。柱に取り付くすべての梁を考慮して適用する。なお、P1@、P2@は、特記された帯筋の間隔とする。

図2.4 帯筋の割付け

3. 1 大梁主筋の継手、定着及び余長

大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。

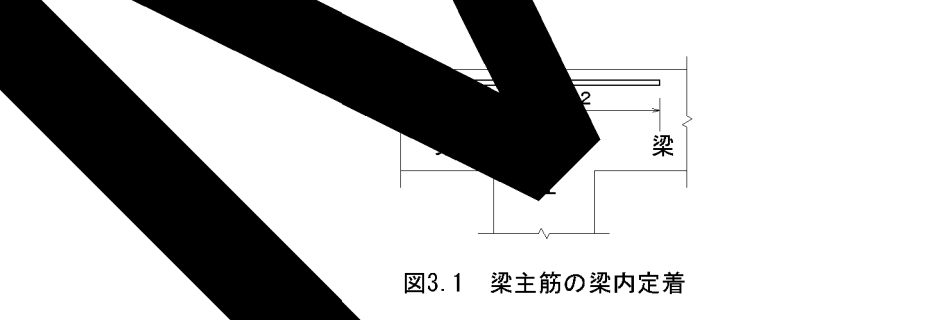


図3.1 梁主筋の梁内定着

大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。

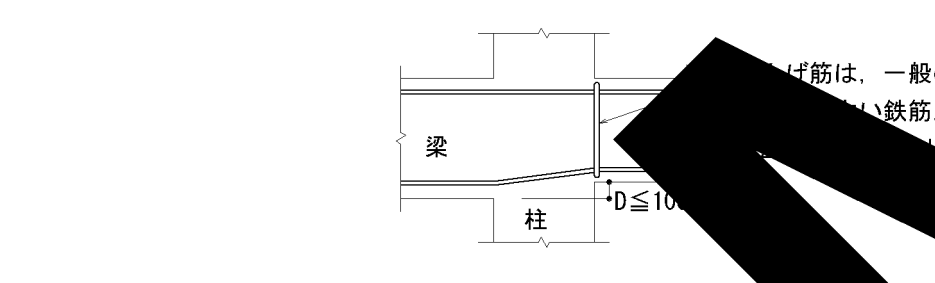


図3.2 段違い梁

大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。

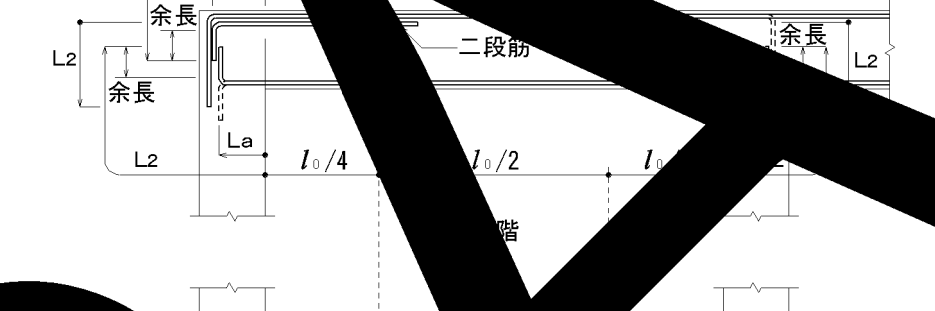


図3.3 大梁の重ね継手

大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。

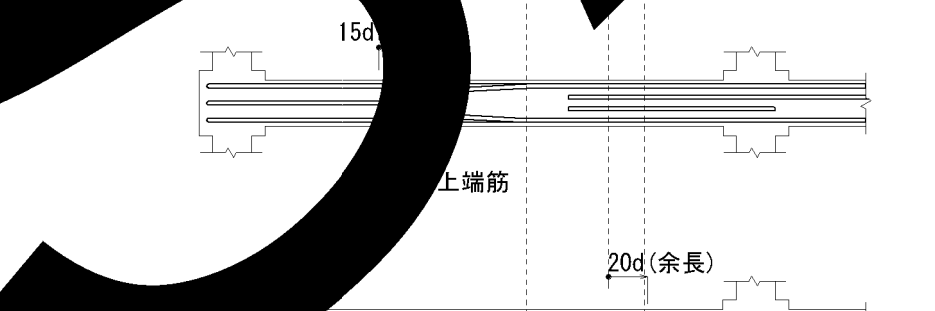


図3.4 ハンチのある大梁の定着及び余長

大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。

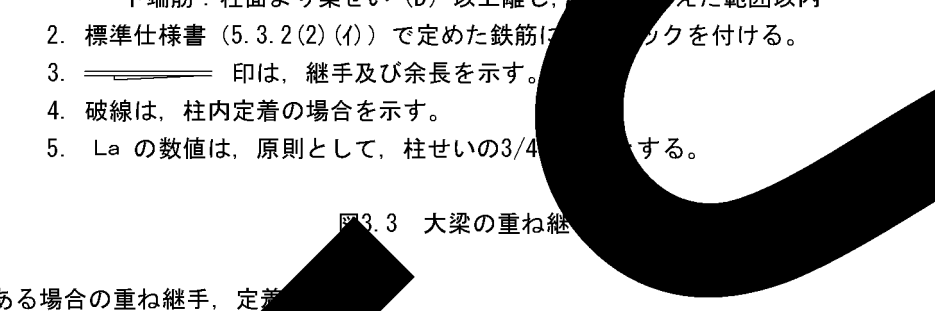


図3.5 ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長

大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。

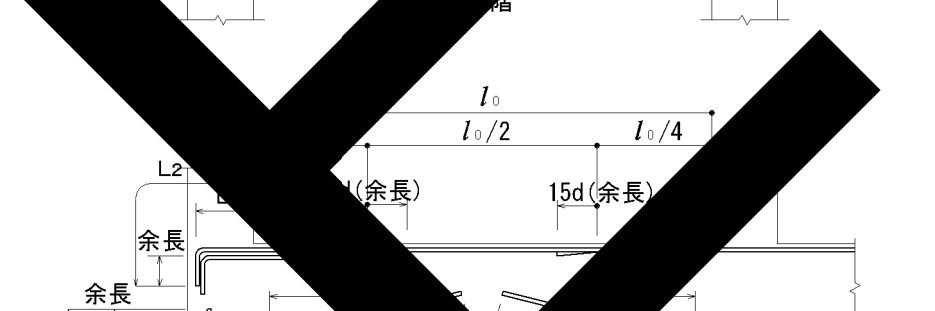


図3.6 ハンチのある大梁の定着及び余長

大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。

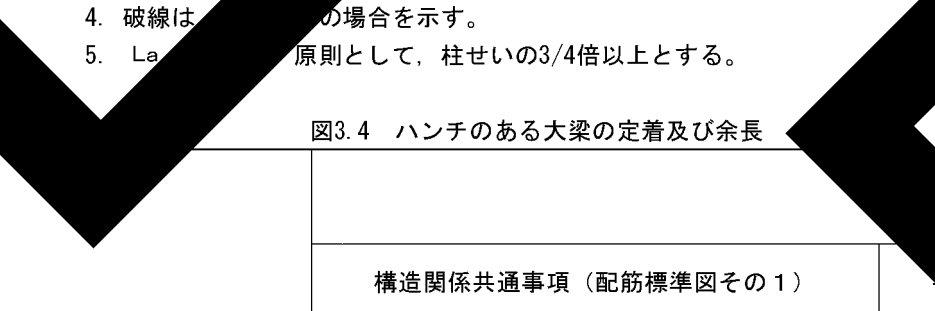
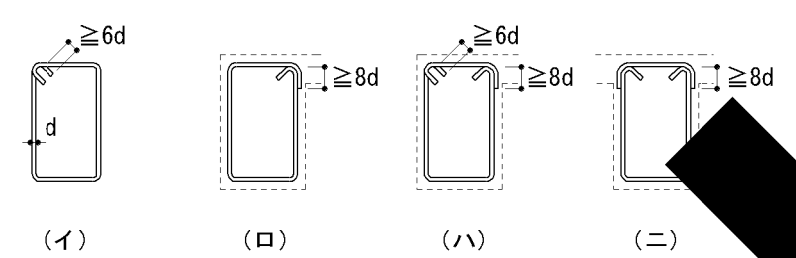


図3.7 ハンチのある大梁の定着及び余長

大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。大梁主筋の継手、定着及び余長の一般事項。

3.2 あばら筋 (片持梁、基礎梁含む) の組立形状及び割付け等

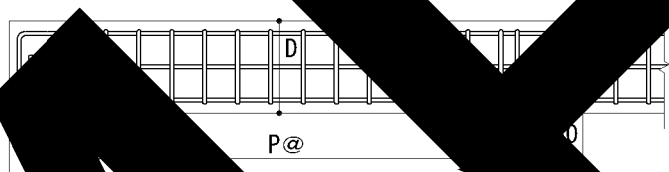
(1) あばら筋の組立形状及びフックの位置



1. (イ) 形を標準とする。ただし、L形梁の場合は、(ロ)又は(ハ)、T形梁の場合は、(ロ)～(ニ)のいずれかとする。フックの位置は、(イ)の場合は交互とし、(ロ)の場合は、L形梁の場合は交互とする。また、(ハ)の場合は床版の付く側を90°折曲げとする。

図3.5 あばら筋の組立形状

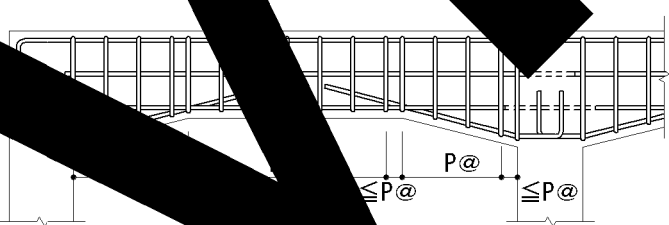
(2) あばら筋の割付け (ア) 間隔が一様でハンチのない場合



1. あばら筋は、柱面位置から割り付ける。 2. L形梁の場合は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.6 あばら筋の間隔 (その1)

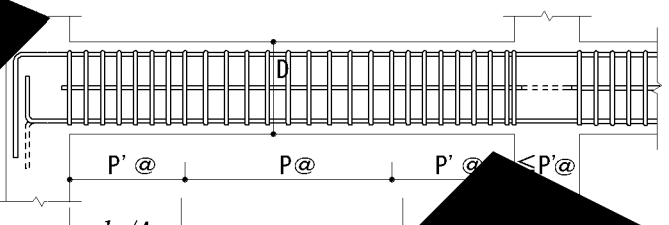
(イ) 間隔が一様でハンチがある場合



1. あばら筋は、柱面の位置及びハンチに切り替わる位置から割り付ける。 2. 図中P@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.7 あばら筋の割付け (その2)

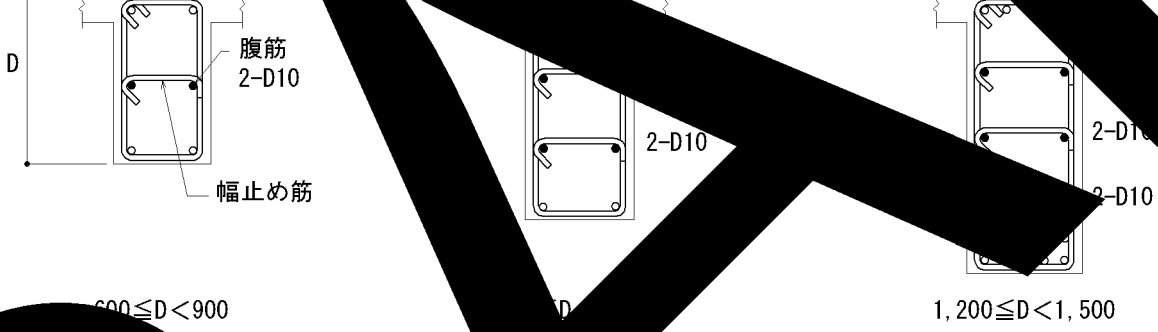
(ロ) 間隔の異なる場合



1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。 2. 図中P@、P'@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.8 あばら筋の割付け (その3)

(3) 腹筋及び幅止め筋



1. 腹筋に継手を設ける場合は、継手長さは、150mm程度とする。 2. 幅止め筋及び変位防止筋は、D10-1,000程度とする。

図3.9 腹筋及び幅止め筋

3.3 片持梁主筋の継手、定着及び余長

(1) 一般階

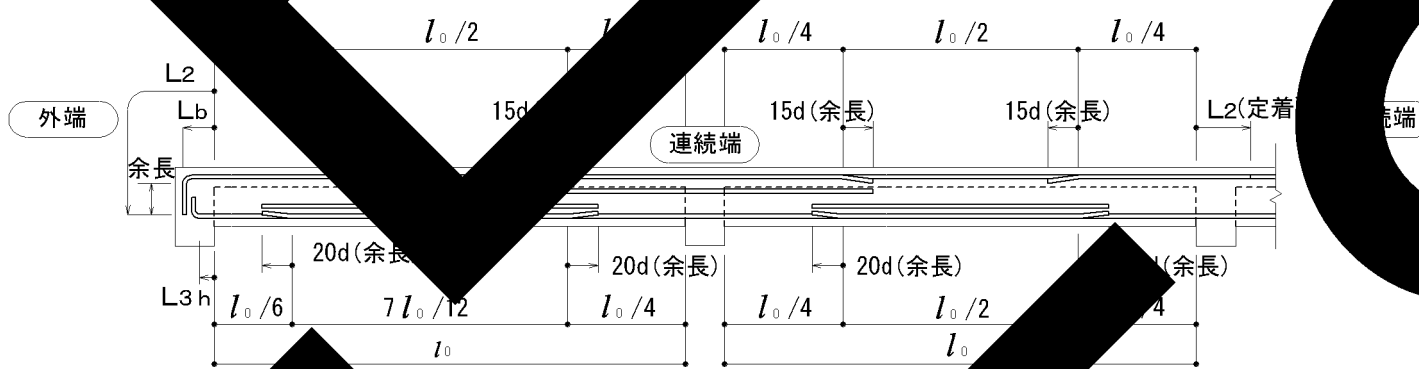


図3.10 小梁主筋の継手、定着及び余長

(2) 単独

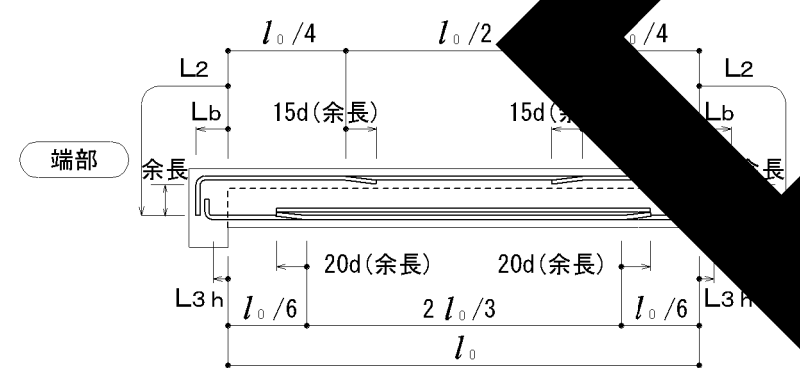


図3.11 小梁主筋の継手、定着及び余長

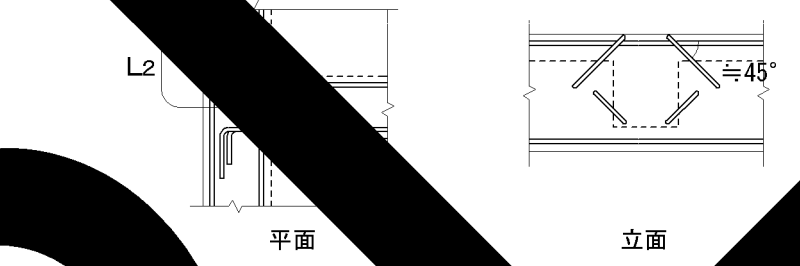


図3.12 小梁主筋の継手、定着及び余長

1. 印は、余長位置を示す。 2. 先端の折曲げの長さは、梁せいから柱せいまでの長さとする。 3. 図時のない事項は、3.11による。 4. Laの数は、原則として、柱せいから梁せいまでの長さとする。 5. L3hを確保できない場合は、標準仕様書(5.3.4(5)(d))によることができる。

3.5 片持梁主筋の継手、定着及び余長

(1) 先端に小梁がある場合

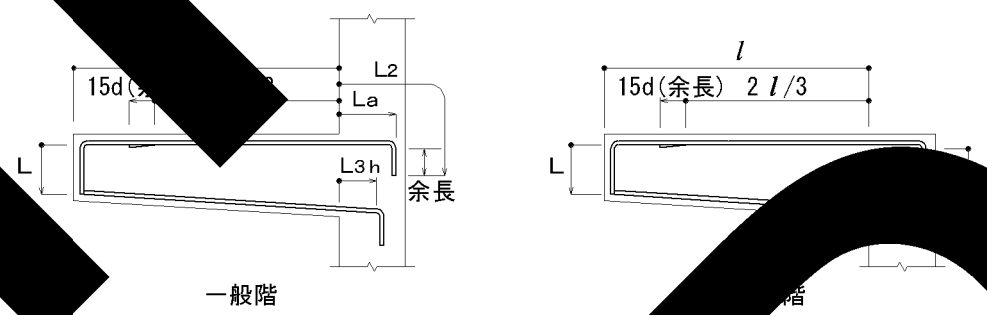


図3.11 片持梁主筋の継手、定着及び余長

(2) 先端に小梁がある場合

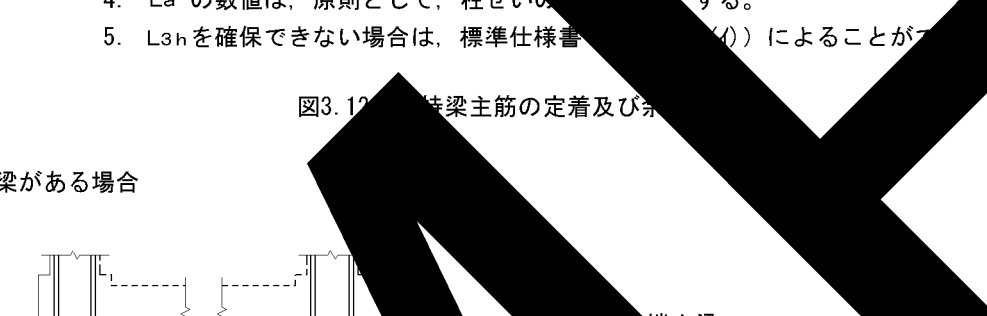


図3.12 片持梁主筋の継手、定着及び余長

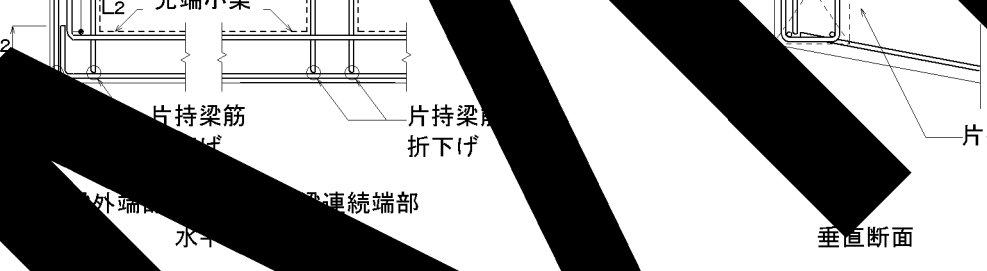


図3.13 片持梁主筋の継手、定着及び余長

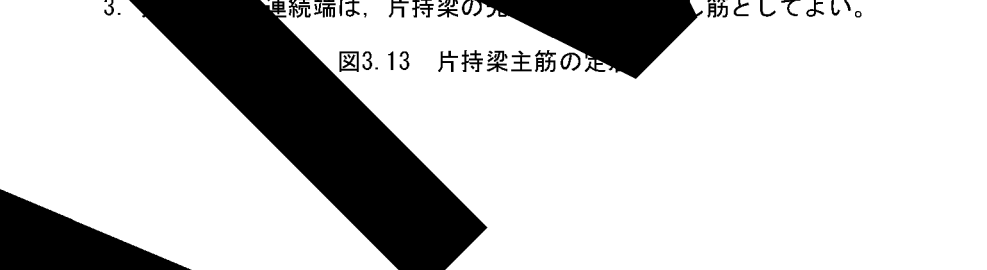


図3.14 片持梁主筋の継手、定着及び余長

4.4 壁の開口部補強

壁の開口部の補強筋は、A形は表4.3の形状、B形は表4.4とする。

表4.3 壁開口部補強筋 (A形)

Table with 2 columns: 壁の種類 (Wall Type) and 補強筋 (Reinforcement). Rows include W15 and W18.

壁開口部補強筋 (B形)

Table with 2 columns: 補強筋 (Reinforcement) and 斜め (Diagonal). Rows include W12, W15 and W18, W20.

(2) 壁開口部補強筋の定着長さは図4.3による。

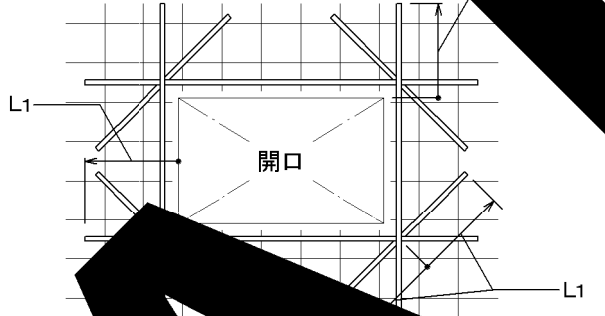


図4.3 壁開口部補強筋の定着長さ

(3) 開口部は柱及び梁に接する部分又は鉄筋を90°折曲げることにより、補強を省略することができる。 (4) コンセントボックス等を壁に埋め込む場合は、図示による。

4.5

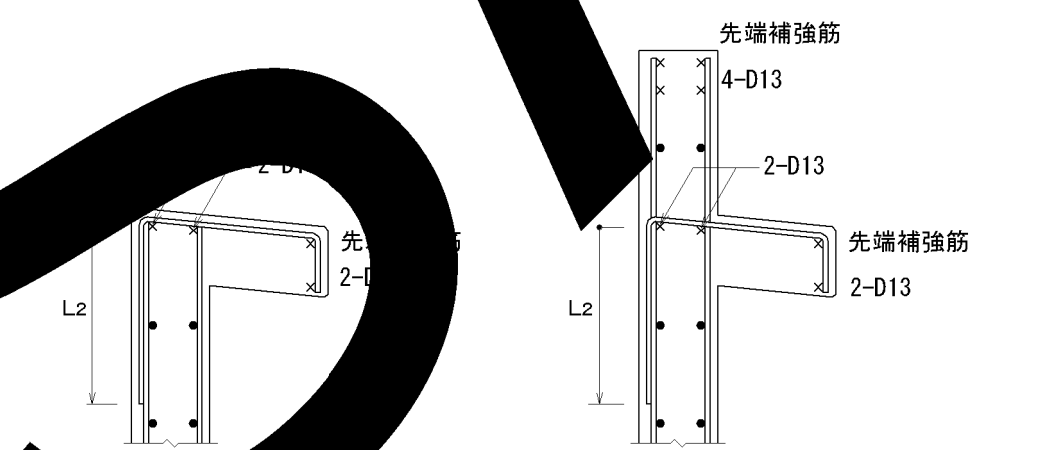


図4.4 バラベットの配筋

(1) 壁の配筋は表4.11による。

Table showing reinforcement types and cross-sections for various wall types (W12, W15A, W15B, W18B, W20A, W20B).

(注) 壁筋の配筋順序は、規定しない。

(2) 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋は表4.2による。

表4.2 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋

Table showing reinforcement types and stages for walls receiving cantilever slab stairs (KW1, KW2, KW3, KW4).

(3) 土圧を受ける壁の配筋は、図4.1による。

4.2 壁の継手及び

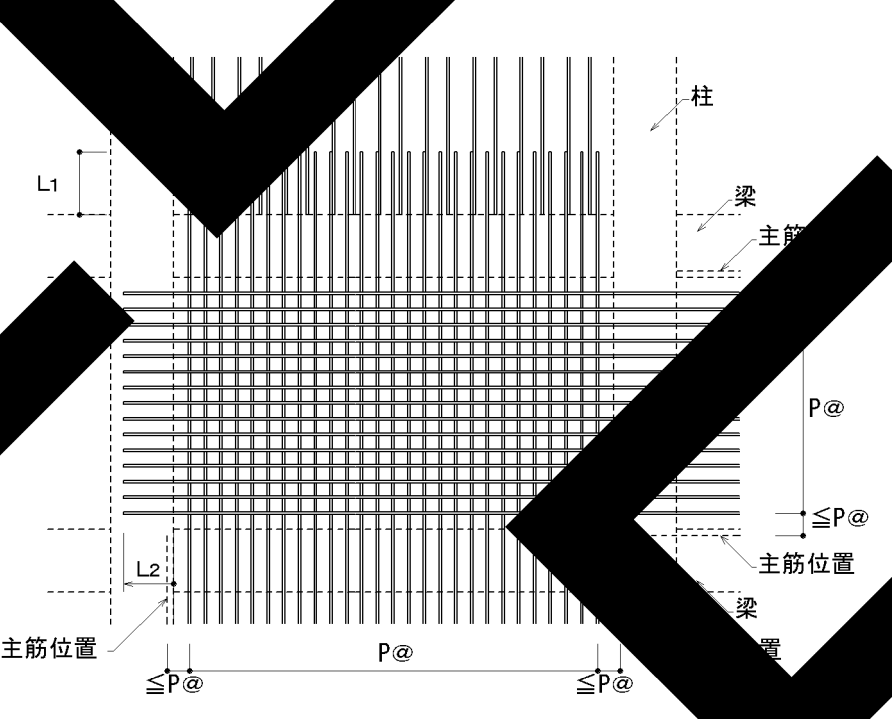


図4.1 壁の配筋

1. 図中のP@は、特記された壁筋の間隔を示す。 2. 壁配筋の重ね継手はL1、定着長さはL2とし、鉄筋の継手位置は柱、梁の中心線とする。 3. 幅止め筋は、縦横ともD10-1,000程度とする。

4.3 壁の交差部及び端部の配筋

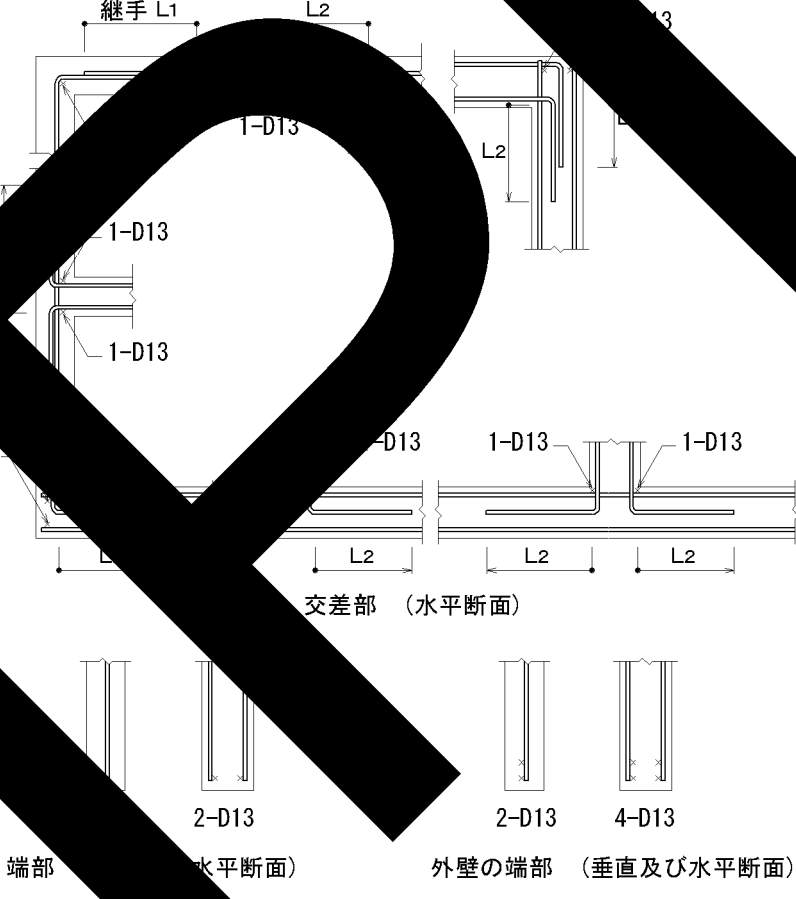


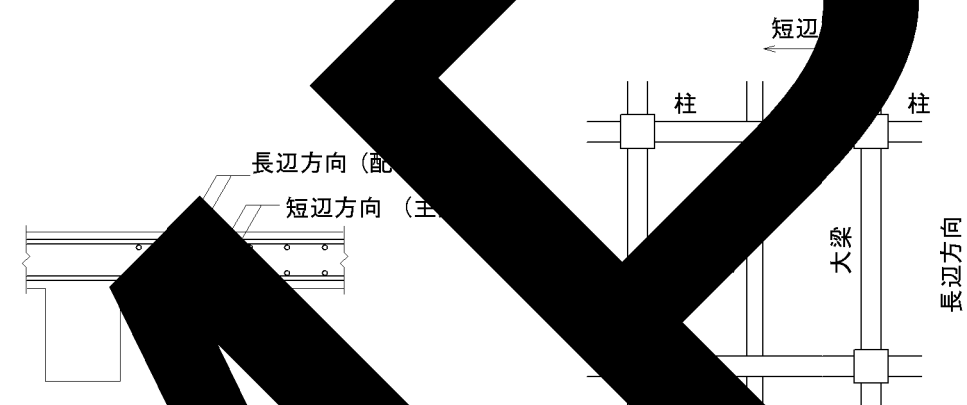
図4.2 壁の交差部及び端部の配筋

5.1 スラブの配筋

表5.1 スラブの配筋

配筋種類	短辺方向 (主筋) 全域		長辺方向 (配力筋) 全域	
	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域
S 1	D13-100 ϕ	D13-100 ϕ	S 8	D10, D13-150 ϕ
S 2	同上	D13-150 ϕ	S 9	D10-200 ϕ
S 3	同上	D10, D13-150 ϕ	S10	D10, D13-200 ϕ
S 4	D13-150 ϕ	D13-150 ϕ	S11	同上
S 5	同上	D10, D13-150 ϕ	S12	D10
S 6	同上	D10-150 ϕ	S13	D10-200 ϕ
S 7	D10, D13-150 ϕ	D10, D13-150 ϕ	同上	D10-250 ϕ

(注) 上補筋、下補筋とも同一配筋とする



1. 配筋の割付は中央部と端部は定められた間隔とする。
2. 鉄筋の重ねは、L₁以上とする。
3. 土間スラブ下の地床厚さは、コンクリート厚さは、特に指定がない限り、それぞれ100mmとする。
4. 土間コンクリート下の地床厚さは、コンクリート厚さは、特に指定がない限り、それぞれ100mmとする。

5.2 スラブの配筋

5.2 スラブの配筋

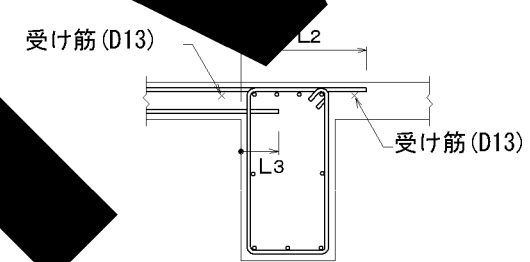


図5.2 スラブ筋の定着長さ及び受け筋(その1)

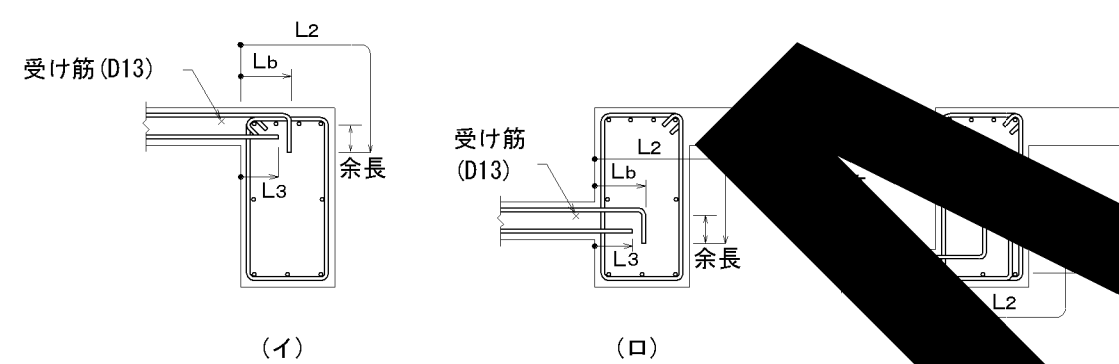


図5.3 スラブ筋の定着長さ及び受け筋(その2)

5.3 スラブの配筋

配筋種類	主筋		配筋種別	主筋	
	主筋	配筋種別		主筋	配筋種別
CS1	D13-100 ϕ	上	CS5	D10-200 ϕ	上
CS2	D13-200 ϕ	下	CS6	D10-400 ϕ	下
CS3	D10	上	CS7	D10, D13-200 ϕ	上
CS4	D10, D13-150 ϕ	下		D10	下

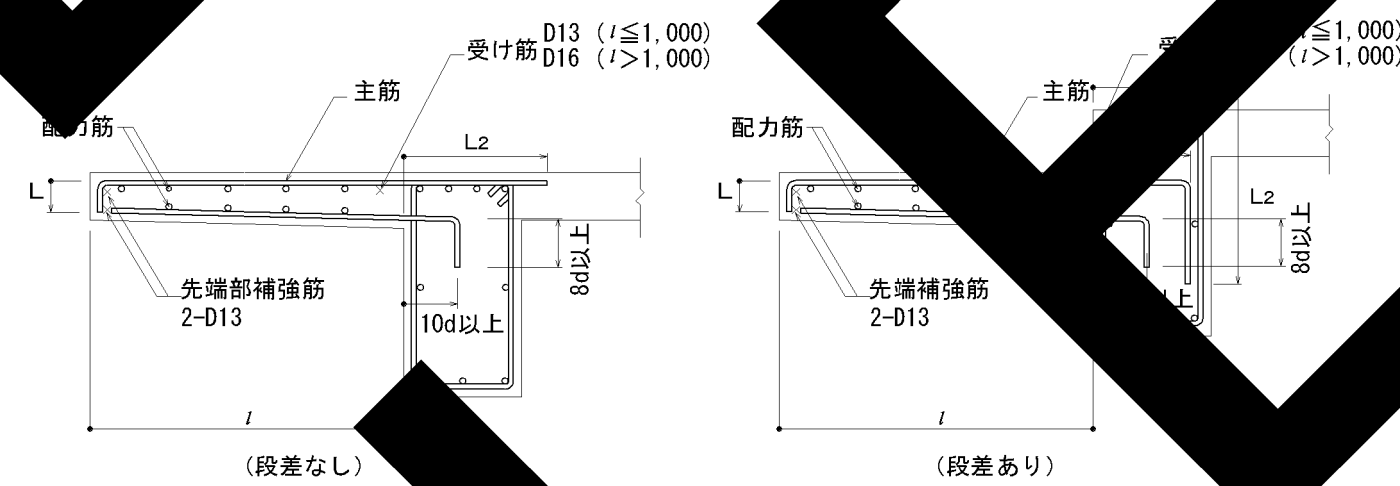


図5.4 スラブの配筋 (CS1 から CS5)

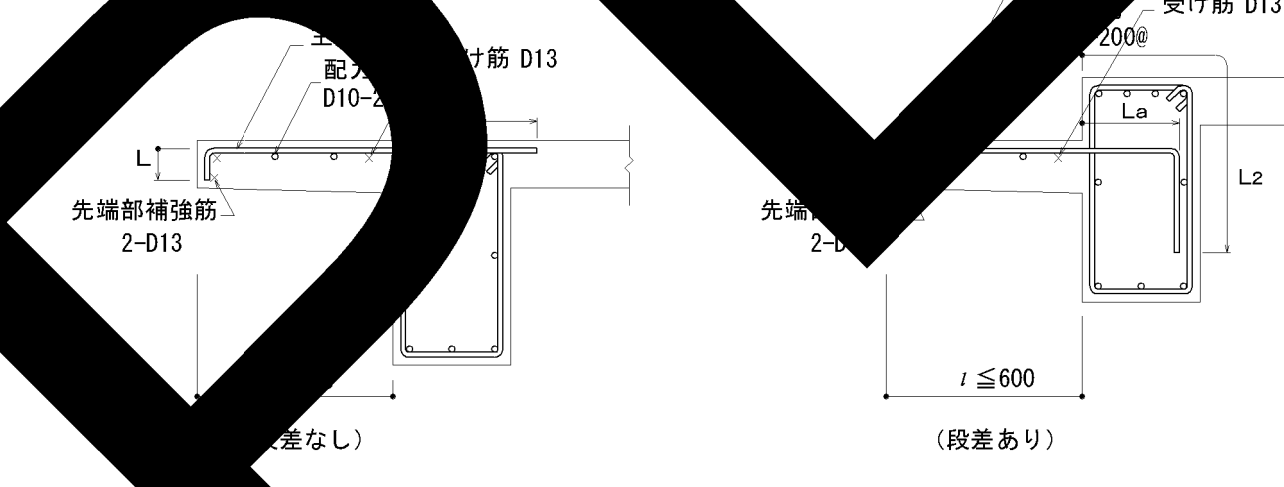


図5.5 片持スラブの配筋 (CS6 及び CS7)

5.4 スラブの先端に壁が付く場合の配筋

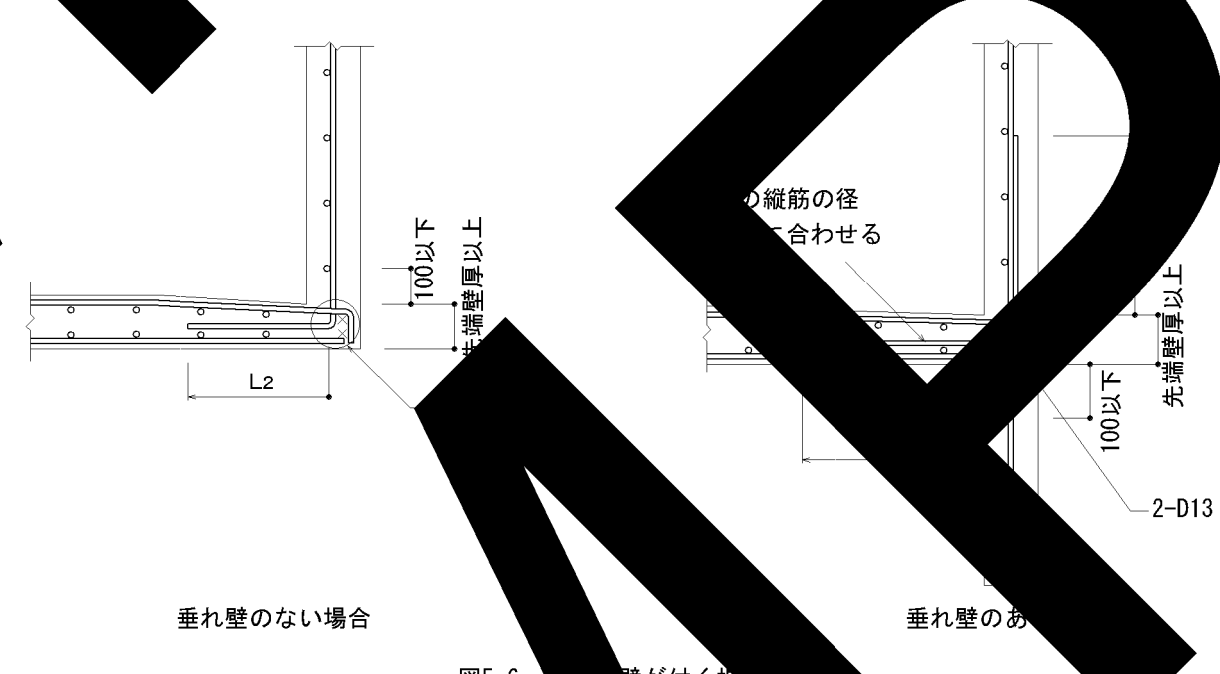
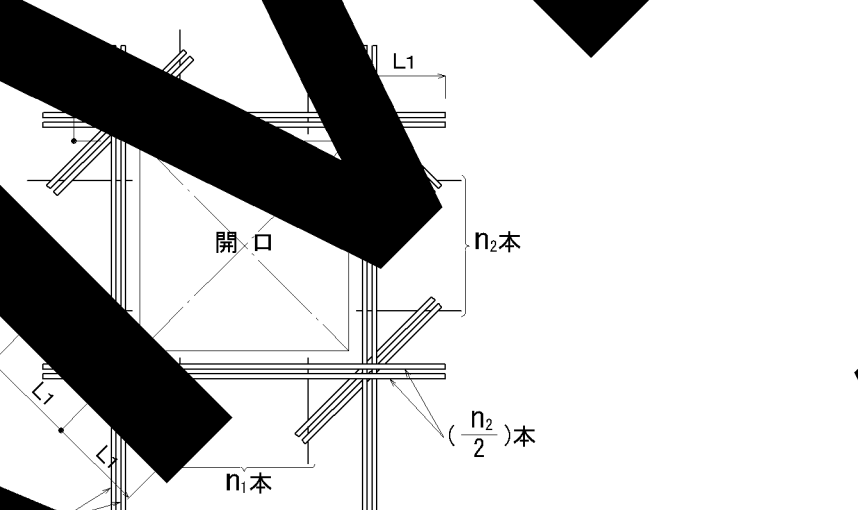


図5.6 壁が付く場合の配筋

5.5 スラブ開口部の補強



1. スラブ開口部は、開口部の鉄筋で周囲を補強し、隅角部に斜め方向に2-D13 (I=2L₁) シングルを上下筋として配筋する。
2. 開口部の最大径が両方向の鉄筋間隔以下で、鉄筋を緩やかに曲げることにより、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。
3. スラブ開口部の最大径が700mm以下の場合に限る。

図5.7 スラブ開口部の補強配筋

5.6 スラブの補強

(1) 屋根スラブの出隅及び入隅部

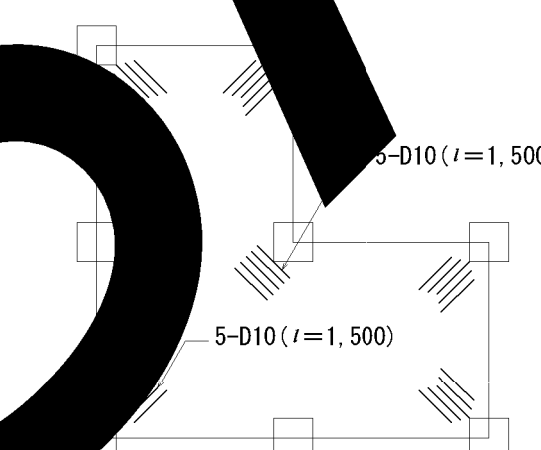


図5.8 出隅及び入隅部の補強配筋

(2) 片持スラブの出隅部

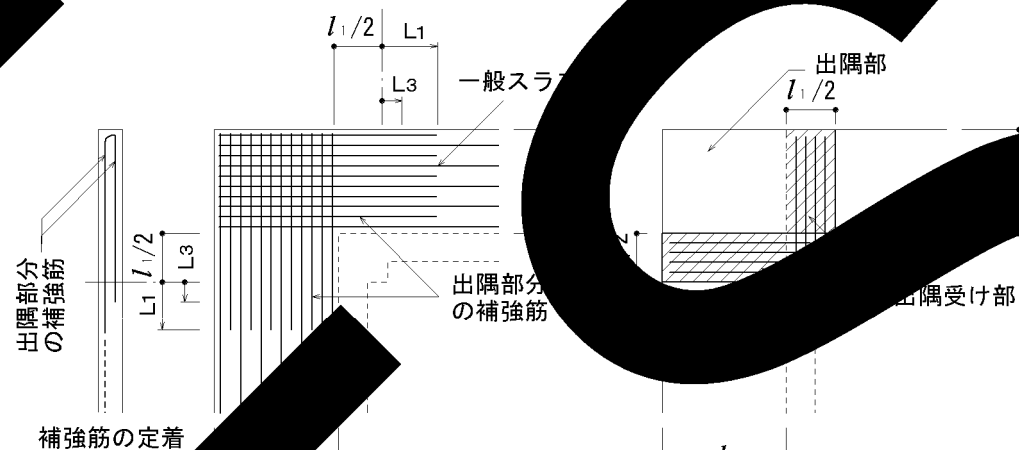


図5.9 片持スラブ出隅部の補強配筋

5.7 スラブの打継ぎ補強

- (1) 土間スラブの打継ぎは、梁とスラブを一体打ちとし、打継ぎを設ける場合の補強を示す。

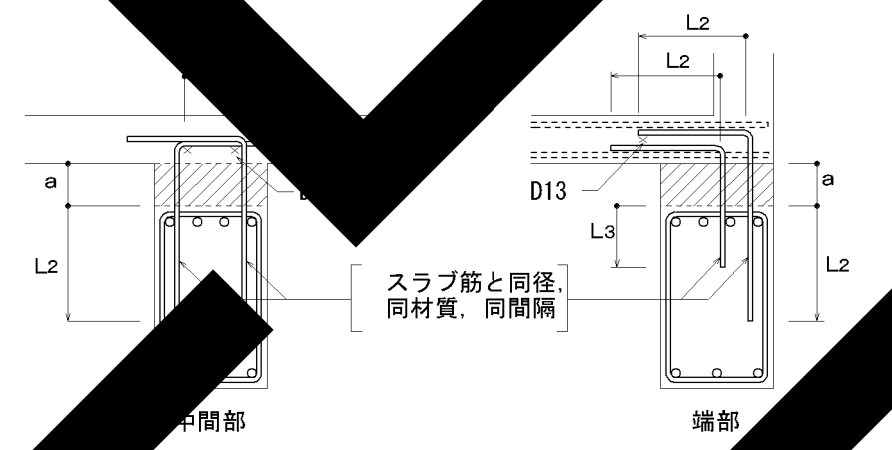


図5.10 打継ぎ補強配筋

- (2) 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋

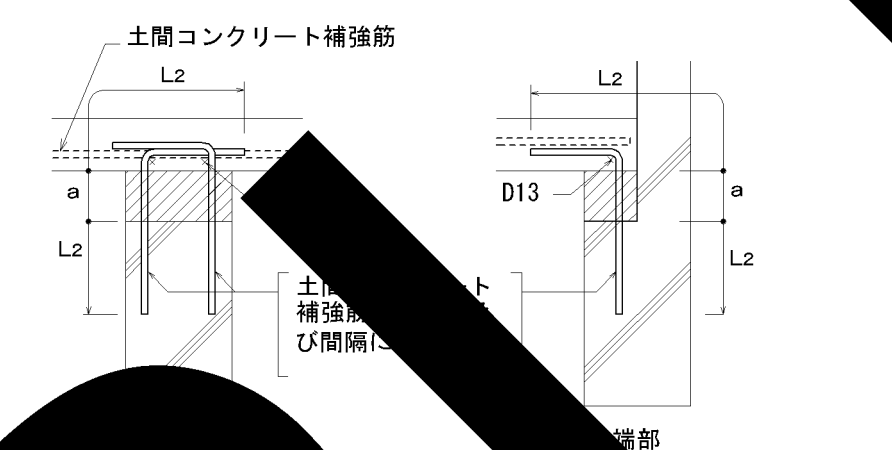


図5.11 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋

1. 土間コンクリートは、土に接するスラブの床荷重を直接地盤へ伝達するものとする。それ以外は土間スラブとして基礎を介して基礎へ荷重を伝達するものとする。
2. 土間コンクリートの厚さは、基礎梁の断面高さに等しい場合に限る。

5.8 段差のあるスラブの補強

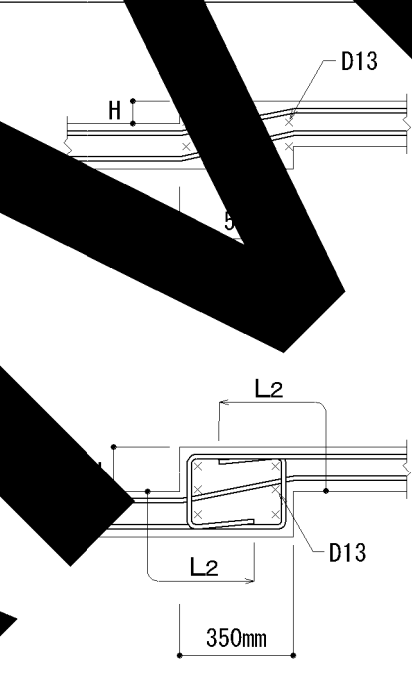


図5.12 段差のあるスラブの補強配筋

1. 150mm以下の段差のあるスラブの場合、図5.12の補強配筋とする。

6.1 片持スラブ階段の配筋

表6.1 片持スラブ階段の配筋

配筋種別	KA1	KA2
配筋図		
配筋種別	KA3	KA4
配筋図		

図6.1 片持スラブ階段配筋の定着

1. 階段配筋は、4.1(2)による。
2. 階段主筋は、壁の中心線を越えてから縦に下ろす。
3. スラブ配筋の継手及び定着長さは、標準仕様書（表5.3.4）の L₃とする。

6.2 二辺固定スラブ階段の配筋

表6.2 二辺固定スラブ階段の配筋

配筋種別	KB1	KB2	KB3	KB4	KB5	KB6	KB7
配筋種別	D13-200#	D13-150#	D13-100#	D13, D16-150#	D16-150#	D16-125#	D16-100#

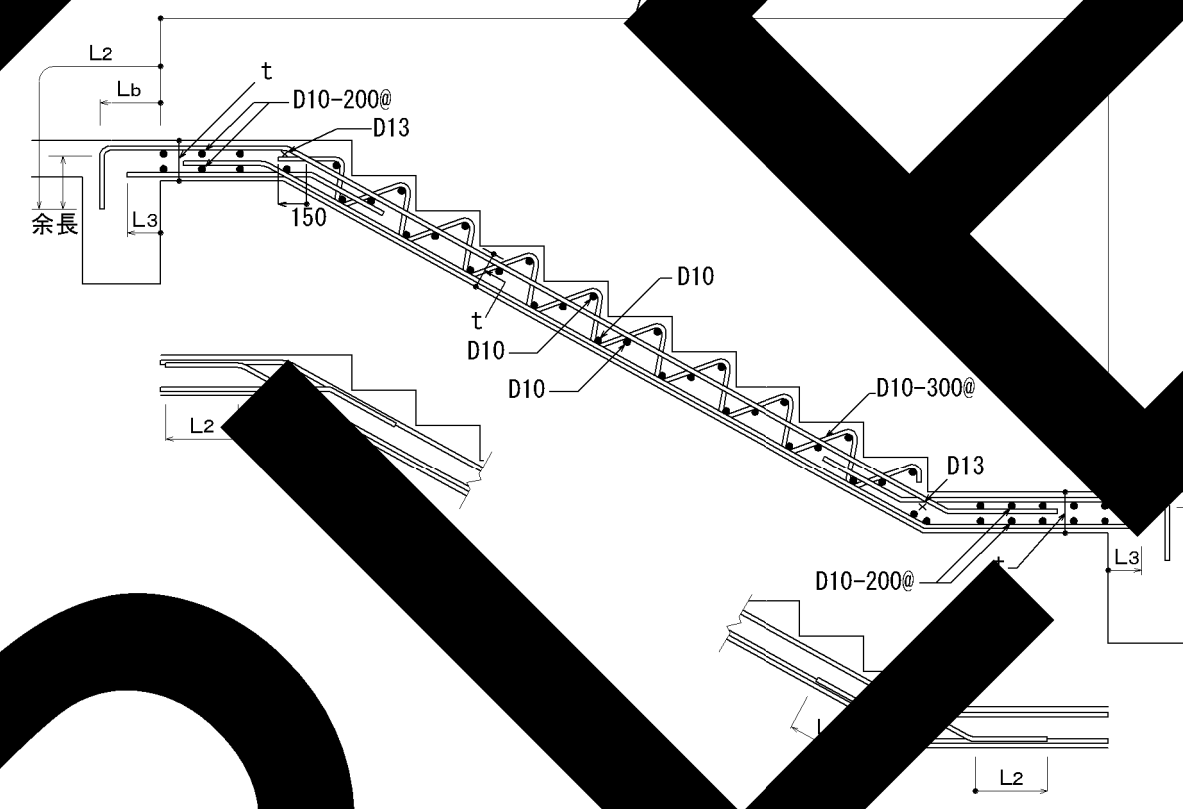
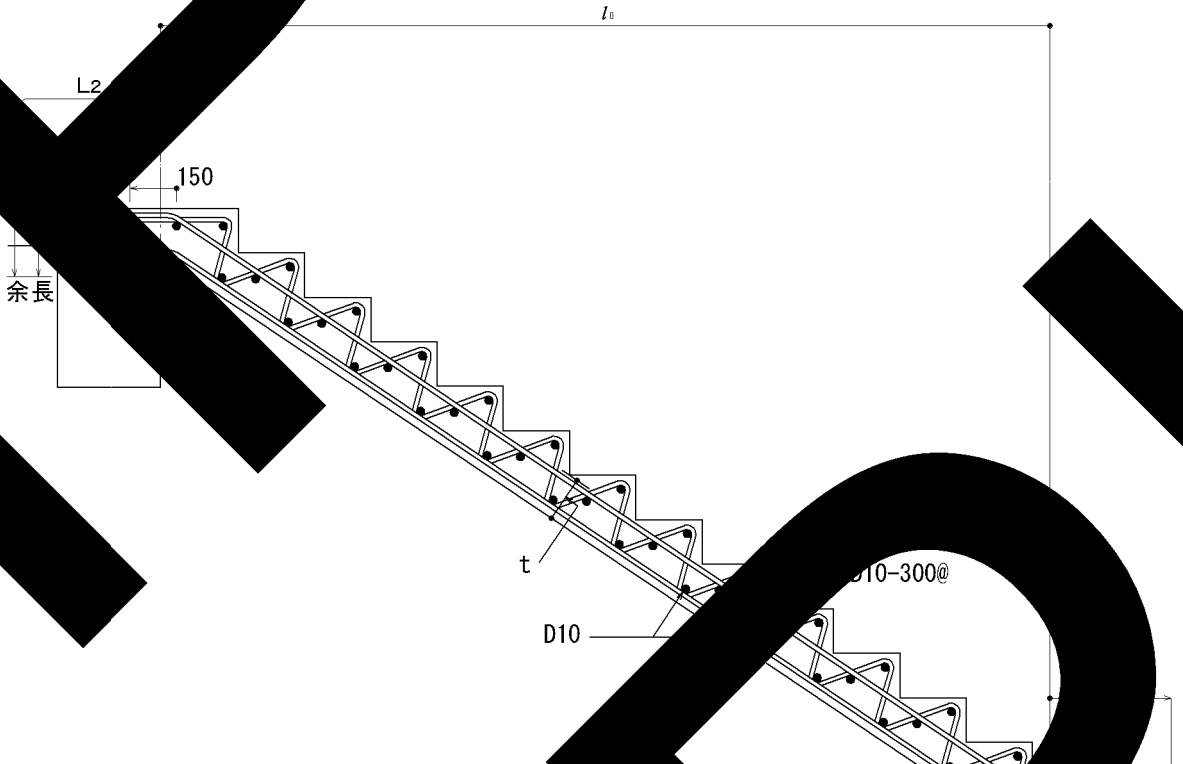


図6.2 二辺固定スラブ階段の配筋



(注) 下図の場合にも二辺固定スラブ階段の配筋を採用する。

図6.3 二辺固定スラブ階段配筋(その他)

7.1 梁貫通孔補強筋の配筋

- (1) 梁貫通孔補強筋の名称等は、図7.1による。
- (2) 孔の径は、梁せいりの1/3以下とし、孔が円形の場合はこの外接円とする。
- (3) 孔の上下方向の位置は、梁の中心付近とし、梁の両端は梁下端よりD/3 (Dは梁せい)の範囲には設けてはならない。
- (4) 孔は、柱面より梁せい以上離す。梁の端部は梁端部及び壁付帯梁を除く。
- (5) 孔が梁の幅の平均値以上とする。
- (6) 補強筋は、あばら筋を跨る。
- (7) 補強筋の定着長さは、図7.2による。
- (8) 補強筋の径は梁せいりの1/10以下、かつ梁の幅の平均値以上とする。未滿のもの、鉄筋を緩やかに曲げることにより、開口部を跨る配筋できる場合は、補強を省略することがある。
- (9) 溶接金網の余長は1倍子以上とし、かつ10mm以上とする。
- (10) 溶接金網の貫通孔部分には、図7.1のリング筋を取り付ける。なお、リング筋は、溶接金網の幅以上溶接する。
- (11) 溶接金網の割付け始点は、あばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。
- (12) 補強筋の径は、図7.1による。

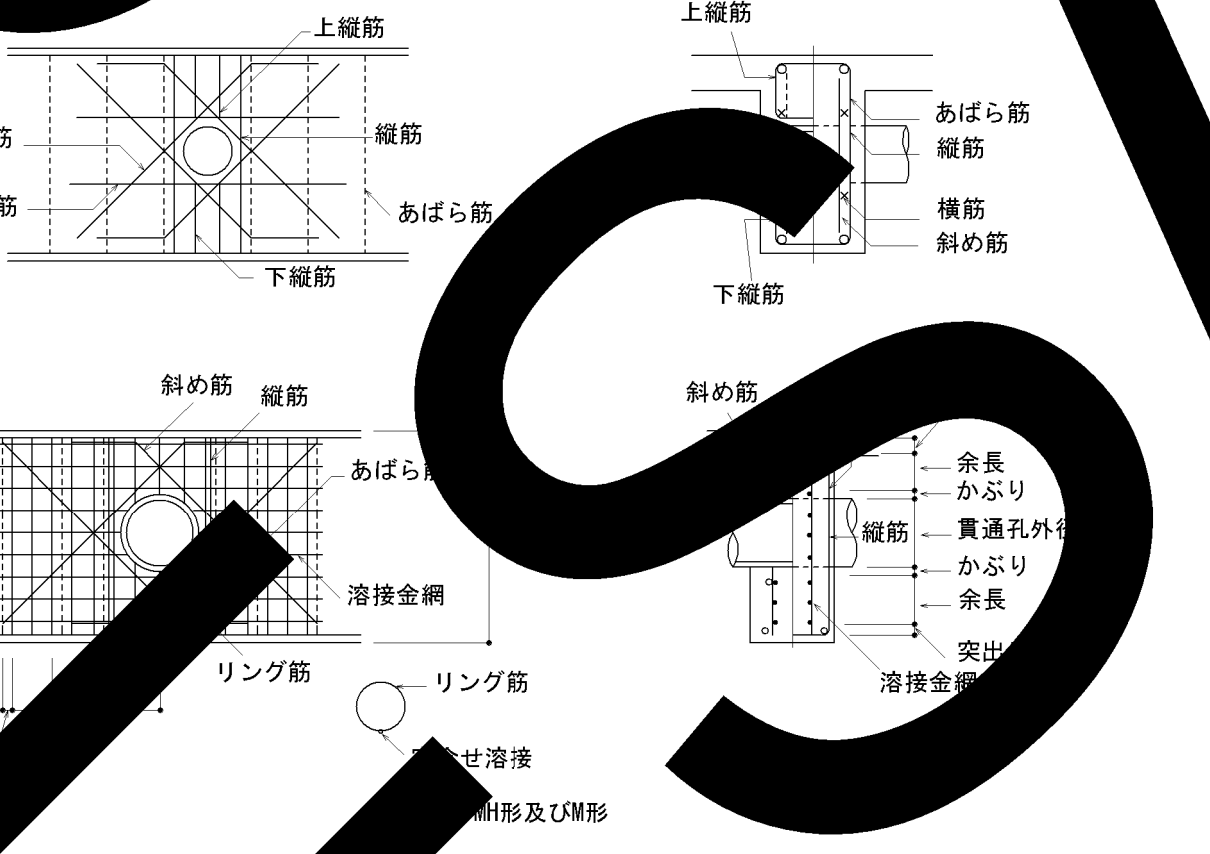


図7.1 梁貫通孔補強筋の名称等

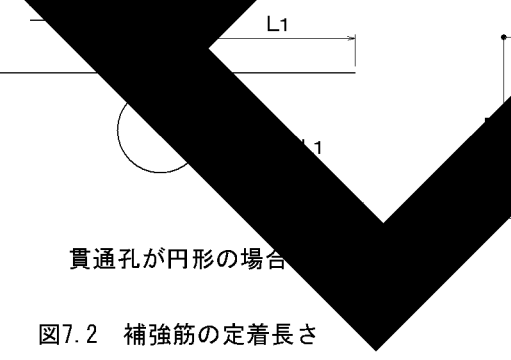


図7.2 補強筋の定着長さ

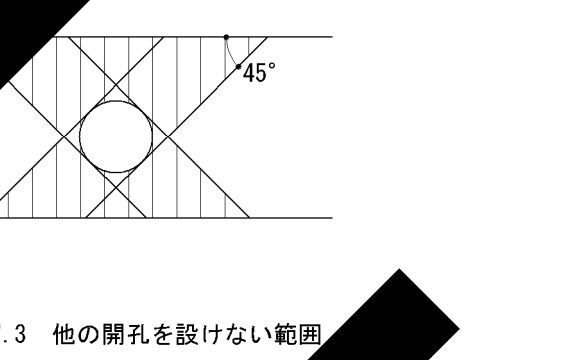


図7.3 他の開孔を設けない範囲

7.2 梁貫通孔の補強形式

表7.1 H形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	横筋	上下縦筋	配筋図
H1	なし	なし	なし	なし	
H2	2-2-D13	なし	なし	なし	
H3	4-2-D13	なし	なし	なし	
H4	4-2-D16	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H5	4-2-D16	なし	なし	なし	
H6	4-2-D19	4-2-D13	なし	なし	
H7	なし	なし	なし	なし	

(注)は、一般部分のあばら筋を示す。

表7.2 M形配筋

配筋種別	縦筋	横筋	配筋図
M1	2-2-D13	なし	
M3	なし	なし	
M4	6-2-D13	2-6φ-100#	

(注)は、一般部分のあばら筋を示す。

7.3 M形配筋

配筋種別	縦筋	横筋	配筋図
MH2	2-2-D13	なし	
MH3	2-2-D13	なし	
MH4	4-2-D13	2-6φ-100#	
MH6	4-2-D13	2-6φ-100#	
MH7	4-2-D19	2-6φ-100#	

(注)は、一般部分のあばら筋を示す。

7.3 コンクリートブロック帳壁との取合い

(1) 控壁の配筋

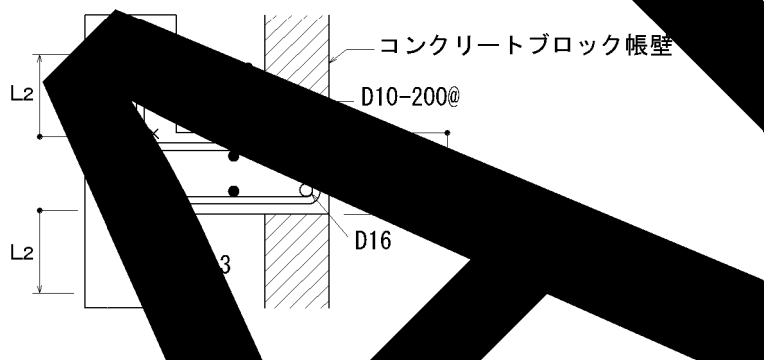


図7.3 控壁の配筋

(2) 主開コンクリート上に設置される場合の補強

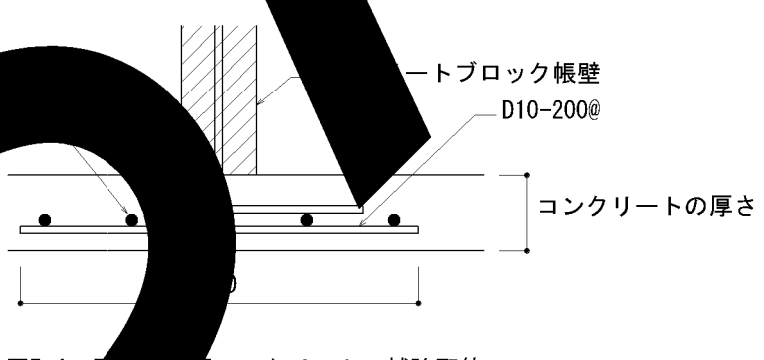


図7.4 主開コンクリート上の補強配筋